

# スイーツ&メモリーズ（ 後篇）

mai-mizuki

どさっと腰をかけたそのベンチの冷たさが、ジーンズ越しにひやりと伝わり、思わず体を縮める。首元に巻いたマフラーにできるだけ暖めてもらうべく、首をすくめながら、しかし三月になってもまだマフラーって、どうなんだろう……と、涼平は小さく溜息を漏らした。

もう三月だというのに、この寒さはなんだ。暖かくなったかと思えばまたすぐ寒くなる、その繰り返し。今の時期がどうにも苦手なのは、ゆるんだ気候につい持ち上がる気持ちが、何回も削がれてしまうからなのか、……そもそも寒いのが苦手なんだよ俺は……。

体重をかけた背もたれの固い感覚も、やすやすとウインドブレーカーを貫通して体に冷気を運んでくる。もっと厚いの着てきたほうがよかったかな、とか思ったけど、……たぶん、着ているものには関係ないんだろう、ともどこかで思っていた。

体の芯のほうから、ほんのわずか、沁みだしてくる寒気、……緊張しているのだ。自分が。

ベンチに座ってから時計を見るのは二回目。そろそろかな、と思ったそのとき、公園を挟んで涼平と反対側、柵が切れた入り口にその姿が現れた。

肩にエナメルバッグを引っ掛けた制服姿だ。大股で一步一步、迷うことなく足を進めてくる、見慣れたその歩き方が、涼平を見つけたのかふいと忙しくなる。最後はほとんど小走りに、慌てて涼平の目の前までやってくると、篤史はその勢いのまま深深と頭を下げた。

「こんにちは、涼平さん、すみませんお待たせして！遅くなりましたっ」

「え？いや、まだ時間じゃないよ。俺が早く来ちゃったから」

まだ待ち合わせの10分前だ。てっきり自分が先だと思っていたんだろう、涼平が待っていたことに動揺したらしい、そのしゃちほこばった直立具合に、おかしくなって思わず笑う。

「つーか、なんでそんな固いの、もう先輩後輩でもないし、もっと普通にしてよ」

「えっ、いえ、そういう訳には、……そんな、先輩です、ずっと」

直立を崩さないその姿勢に、……こいつも緊張してんのかな、とふと思った。

「座ったら？」

「……はい」

涼平が促したのに、篤史はおそろおそろベンチに腰掛けた。涼平との隙間が50センチくらい開いている。

ぎしっとベンチが軋んで、一瞬漂った沈黙、……しかし次の瞬間、涼平は顔を横に向け、声を出した。

「どう、調子は？練習だったんだろ、さっきまで。……つーかこんなときに呼び出したりしてごめんな、試合近いのに」

「えっ、いや、全然、全然です！……そうですね、調子は悪くないです。チームもだいぶ、固まってきたかな、……相変わらず、皆に助けられてる感じなのは変わらないんですけど」

「そんなことないだろ。調子いいなら良かった、頑張れよ」

「はい。ハルタイは、はい、頑張ります」

篤史の言葉のあとを、また沈黙が埋めて、……涼平は観念したように小さく溜息をついた。

本当は、もっと練習の話とか試合の話とか聞きたかったのだけど、お互いにガチガチだし、…緊張している理由もお互いにわかってるし、もうそっちの話を先にしないとムリっぽい、と悟ったのだ。

「あの、ありがとな、……チョコと、それからお守り」

2月14日のバレンタインデー、篤史にもらった箱には、チョコレートと、それから学業御守が一緒に入っていた。このあたりでは有名な神社のものだ。練習で忙しい合間を縫って、わざわざ準備してくれたのかと感激して、もちろん試験にも持っていった。

「いや、いえ、なんかこちらこそ、わざわざありがとうございます」

相変わらず、コチコチに固まった体で篤史が応じる。

篤史には、もらったその日にお礼のメールを送ったのだけど、面と向かって言うのは初めてだった。……ちゃんとお礼言わないとな、と思っていたのが、篤史に待ち合わせしないかと声をかけた理由のひとつ、……それから、理由はあともうひとつ。

「俺ね、……よくわかんなくてさ」

「……え？」

「俺さあ、」

ウインドブレーカーのポケットに突っ込んだ手を握る、……指先が冷たいのに気付いて、さらにぎゅっと握りこみ、……息を大きく吸って、言葉を繋げた。

「バレンタインにチョコとかもらうの、生まれて初めてでさ。なんか、全然なにもわかってなくて、義理とか、……本命とか、いろいろあんでしょ、だから、お返ししようと思ったんだけど、全然ピンと来なくて、……なんか、ごめんって感じで」

今日は3月14日だ。ホワイトデー。バレンタインデーにもらったチョコと気持ちのお返しをする日。……去年までは、バレンタインデーと一緒に、お菓子メーカーの策略だとか敵視すらしていた日。

篤史だってもちろん、何故この日に自分が呼び出されたのか、わかっていないはずはないだろう。それで緊張しているんだろう、いったい何を言われるのかって、……涼平の緊張も敏感に感じ取ったのかもしれない。

「……ああー……別にいいんです、お返しとか、……俺が渡したかっただけなんで」  
「つけてったよ、お守り、つーか今も持ってる」

鞆のポケットをごそごそして、お守りを引っ張り出す。鮮やかな赤地に白の糸が、薄暗くなってきていたその景色の中、くっきりと浮かび上がって見えた。

「ありがとう、ほんとに」  
「いえ、喜んでもらえたらそれで十分です。いやほんと、お返しとか、気遣ってもらわなくていいんで」

篤史の言葉とその口調に、あれっとなんか引っ掛かる。「もう十分です」とか繰り返して、話を終わらせようとしているかのような、……ああ、そうか、自分が「ピンと来ない」とか言ったから、お返しが無い言い訳でもしているように聞こえてるのか……。

違う。そうじゃない、言いたいことはそういうことじゃなくて、……ああもうどう言ったらいいんだろう！？

ずっと考えていたのに、今日ここに篤史を呼び出して何を言おうか、……でも結局、ごちゃごちゃと混乱した頭のまま、もういいや、と、涼平は鞆のポケットに手を突っ込んだ。

「これ。やる」  
「……え？」

ポカンと動かない篤史の目の前に、ぐいっと手を突き出し、ホラ、と促して、開いた手のひらにぽとりとそれを落とした。

「ボタン。制服の」  
「……」

篤史はじっと手のひらに視線を落したまま動かない。……どんどん周りを埋め尽くしていく沈黙に、全然間がもたなくて、涼平はぼりぼりと頭をかいてから、……意を決して、口を開いた。

「あのさ、……ほんと、俺、わかってなくてさ、  
……つうか、全然知りもしなかったし、気付きもしなかったんだよ、その、……そういう、おまえみたいな、……男を好きになったり、そんなのがふつうにあるってことも、……おまえに言われるまで」

「……」

「おまえに言われたから、気付いたっつうか、……なんか、俺のいるとこって、ほんと狭いんだなあって、……そりゃ高校生だしもちろん狭いんだけど、もっと、いろんな世界がふつうにあるんだなって、……気付いて、ブレイクスルーっていうんかな、おまえのおかげで」

「……」

「高校でさ、いろんな奴に会ってさ、大事な奴らにもいっぱい会ったけど、……でも、三年間で一番、とくべつ、スペシャルつつたら、やっぱおまえかなって思って、……まず、俺でもいいなんて言ってくれる人、いたんだって、感動すらしたし、

なんかスペシャルなもん、お返しで渡したいけど、何だろって思って、……で、ボタンとか？って思って」

卒業するときに、制服の第二ボタンをもらう。

中学時代から、ちょくちょく耳にしたそんなしきたりが、本当に行われているのかどうかもよくわからなかったけれど、まず涼平たちの学校の制服は詰襟じゃなくブレザーだし、……しかもそういうときって大抵、女子が好きだった男子に告白するもんじゃないのかとか、自分が篤史にボタンをあげるのは構わないのかとか、……いろいろ、よくわからないことだらけで、頭を悩ませた挙句、

最後、もういいや！と、勢いだけでボタンを外して鞆に入れてきたのだ。

「よくわかんないんだけど、よくわかんないから、なんか、おまえの気悪くしないかなとか、いろいろ考えたんだけど、でもやっぱ、渡したいなって思ってさーって、え？」

隣から、ぶしっ、と鼻をすする音が聞こえたのだ。

慌てて横を振り返ってみれば、篤史が拳を握りしめたまま、大粒の涙をぼろぼろとこぼしているのが見えて、うわっ！と思わずその肩に手を置く。

「うわ、おまえ、なに泣いてんだよ！」

「だって……りょうへいさ……っ」

大きな体を折り曲げて、ぶしぶしと鼻を鳴らすその姿に、……喉元に、なにか、嬉しいとも悲しいとも判別のつかない感情の塊が、こみあげてくる。

「おまえ……泣きすぎ、卒業式んときも号泣してたじゃんか」

つい一昨日に執り行われた卒業式で、久しぶりに野球部のメンツが全員揃ったのだが、涼平たち、つまり卒業する当の本人よりも、送り出すほうの二年生が涙をぼろぼろこぼして大変だったのだ。

涼平だって、式の間やそのあとのホームルームで、胸に込み上げてくるものがなかったわけではないのだけれど、大泣きする篤史を前に気が抜かれたというか、むしろ笑ってしまった。

そのときと一緒にだ、……目の前の後輩がいとおいしいやら可笑的いやらで、胸がいっぱいになって、……笑うしかなくなるような、この感じ。

こら、と笑いながら、頭をぽんぽん叩いてやる。……篤史はやっと少し落ち着いてきたのか、ずずーっと鼻をすすり、

「おれ……涼平さんの前だと、とくべつ、ダメっす……」

「なんだよそれ」

「だって……うれしくて……もらっていいんですか、こんな大事なもの、ほんとに……っ」

言葉尻がまた嗚咽に変わり、ぶしぶしと鼻をすする篤史の頭をそっと撫でる。

「うん、やるよ、……よかった、喜んでもらえたみたいで」

「うれしくない、やつなんか、いないっす、こんなの、もらって……！」

「そうかな」

篤史は、ボタンが握られているその手を、もう片方の手でぎゅうっと強く握り、呟くように言葉を発した。

「……嬉しくて、……そんで、辛い……」

「……」

篤史の言いたいことが、……気持ちがよくわかって、涼平は思わず息を詰めた。

そうだ。この距離が、……とても近いのに、最後はどうしても飛び越えられないこの距離が辛いと思う気持ちは、自分にだってある。篤史のその辛さには敵うべくもないけれど……。

「……なんか、やっぱり、押し付けちゃったかな、……ごめん」

やっぱり自分には、篤史の気持ちは正確にはわからない、……わからないし、どうしようもない。

だけど、それでも、自分の精一杯を返そうとしてきた、この気持ちは、……本当は、ただの自己満足なのかもしれないって、それもずっと涼平が考えていたことだった。

涼平の言葉に、篤史はハッと体を震わせてから、ぶんぶんと首を横に振った。

「違います。押し付けなんかじゃ、……嬉しいです、ほんとに、大事にします、一生」  
「……うん、……ありがとう」

篤史の言葉に、……どこかで、ほっと安堵するような感覚。

ようやく、落ち着いてきたのか、隣から聞こえてくる鼻音が静かになった。ぽん、ともう一回篤史の頭を軽く叩いてから、涼平は体を前に向ける。

少しの間、また沈黙が場を支配したが、もう息苦しさはなかった。言いたいこと言ってすっきりしたからかな、……現金なもんだよな、と、僅かに口許に苦笑いが寄る。

と、隣の篤史が、もぞりと身動きをする気配がした。

「涼平さん」

「ん？」

「あの、……お返しついでに、いや、記念つつーか、卒業の思い出とか、」

「え？」

「あのう、……キス、してもいいっすか」

「……はあ！？」

篤史の言葉を理解するのにかかったコンマ何秒かの際に、ぐっと腕をとられて固まる。咄嗟に体を引いたが、びくとも動かないその腕と自分の体、……くそ、なに、この腕力……！

「う、いや、やめろ、だって俺ファーストキス……！！」

瞬間、ちょん、と唇に乗った、かさついた感触。

あっけにとられて見返した篤史の顔は、目が真っ赤で鼻も真っ赤で、ひどい有様で、……それから、にいと笑ったその表情に、また意識を持っていかれる。

「……へへ、やった、ありがとうございます」

「……おまえなあっ……！」

「忘れません、俺、一生、涼平さんのこと、……涼平さんも」

「……」

思わず、笑っていた。

「……忘れるわけないだろ」

ああ、ファーストキスを男に奪われるとか……！

一生忘れられねえよ、忘れるわけがない、……おまえだってわかってて、それでやったんだろ……！

篤史も嬉しそうに笑った。

「よかった」

「……つーか大ゲサ、忘れないとか、ふつーに会うだろ、これからも！」

「うん、試合来て下さい、練習にも」

「行くよ。もちろん」

「一目で見つけますから。スタンドにいる涼平さんのこと」

「ムリだろ」

「いや、できます。一発っす」

笑いながら立ち上がって、……もう辺りが暗いのに驚く。

思い出したように寒さが忍び寄ってくる、……さっきまで他のことに集中していて全く気付かなかったのだ。

「メシ食って帰ろ」

「いっすね。腹すきました」

篤史の笑顔に笑い返したとき、……急にまた、寒いと思っていたはずのその空気が気にならなくなった。

そうだよな。

新しい季節はもうすぐそこ、……きつともう、寒さがぶりかえすこともない。どんどん気温もあがって行って、春になり——またすぐに、こいつらが甲子園を目指す夏になる。

「ラーメンがいいなあ、どこ行こっか」

並んで歩き出しながら、……ああ、俺、卒業したんだなあ、って、そんな実感がストンと涼平のどこかに落ちていた。

〈終〉

☆あとがき☆

晋太郎さんのお話は全部好きですが、「ナイン・ストーリーズ」が好きで、涼平くんが好きで、いつかぜったいファンフィクション書くぞ！とっていました。原作と同じくらい、深いとこ



ろまで潜れたら、と思って書いていましたが、難しかった……。やっぱりナインストーリーズはすごいです。

原作の涼平くんパート「空色パステル」で、宗匡くんの「多分そいつも、それとおんなじ気持ちでお前のことが好きなんだぜ」というセリフに、涼平くんと同じように胸を打たれ、それから、突然訪れたブレイクスルーに正面から立ち向かい成長していく涼平くんに惚れました。大好きです。

篤史くんにとちょっといい目にあってほしい！というのが、もうひとつのテーマでしたが、いい目……あえたかなあ……。

とくに前篇は、原作のキャラをできるだけたくさん出そう！と心がけて書いたのですが、涼平くんの飼い犬、ビーグル犬のチビを出せなかったのがちょっとだけ心残りです。（けっこう捻ったけど登場させられなかった……）

それから、心残りといえば、彼らの進路。涼平くんはどうなったのかな、保ちゃんは、壱成くんは無事志望校に合格したのかしら、マサゲンは同じ大学に行けたのかしら……！？とかなんとか、老婆心はとどまるどころを知りませんが、たぶん、それらも全て読む人の想像にゆだねられているんですよ。そこも底が深いところだなあ、と思います。

ファンフィクションを書くことを快く了承していただきました、晋太郎さんに心から感謝いたします。ありがとうございました！本当に楽しかったです。

願わくばまた、球児たちにどこかで会えることを祈って！

ありがとうございました。

水城麻衣